横濱タウン新聞
2001年(平成13年) 3月22日(木)

里山に生き物が返ってきた

荒井沢市民の森愛護会

森を守る市民ボランティア

「子供が遊べるような山にしたい」

横浜市栄区と鎌倉市側に接する横浜市の「荒井沢市民の森」を、市の委託を受けてボランティアで管理している住民グループ「荒井沢市民の森愛護会」(野村政晴会長)の活動が注目され、2001年度から国土交通省が導入する緑地管理の"ひな型"にもなった。全国紙やテレビなどのマスコミでも紹介され、山には貴重な植物や小動物も返り始めた。

急斜面の山の雑木林から、刈り取ったササを下ろす作業をする下山田さんは会の最長老の77歳。

■急斜面の山で作業

3月11日。快晴の「荒井沢市民の森」には春の柔らかい日差しが注ぐ。午前十時、「ごくらく広場」に集まった「荒井沢市民の森愛護会」の会員は今日の作業場の拠点となる「炭焼き広場」に向かった。

作業は、すでに刈られた笹(ササ)の回収。乾燥のために放置されていたササを束ね、平地に下ろす。10人ほどの会員が急斜面の雑木林の山を登り作業に取り組む。会の最年長の下山田さん(77)も先頭に立って、不安定な足場でのササ回収を手際よく進める。

下草刈り、ツタの刈り取り、雑木の伐採、風倒木や古木の撤去、萌芽更新によるひこばえの管理など、真夏の炎天下も極寒の真冬でも一年中、愛護会の「荒井沢市民の森」の管理作業は途絶えることがない。

■地主・市民・市が協同

約6ヘクタールある「荒井沢市民の森」は1998年(平成10年)5月に開園、今年の5月で3年目を迎える。

「荒井沢市民の森愛護会」は横浜市のよびかけによって作られたボランティアグループ。結成当時のスタッフは150人ほどだったが、現在は約85人が里山の管理に当たっている。

横浜市では、市内の5ヘクタール以上の樹木林を対象に地主と10年以上の契約を結び、市民の森などの市民の憩いの場を提供してきた。その管理を一般市民にゆだねるための制度が「愛護会」である。

里山は管理された山と田がセットになっていることが大切。山と田の自然の循環作用によって生態系が活発になり、植物も動物もいきいきと生息する。この田は地元の小学生が稲作をする体験田圃としても使われている。

現在23カ所ある市民の森の21カ所までの愛護会の活動は、市が依頼した散策路の手入れ程度の管理業務だった。しかし、22カ所目の市民の森となった「荒井沢」の愛護会の活動は建設省(当時)がひな型とするほどの画期的なものだった。

地主と市民と市(行政)が対等な立場に立って協力関係を結び、荒れた雑木林だった樹木林(里山)を、市民と地主が協力して管理できるようにした。

荒井沢の愛護会メンバーは、開園前の一年間、ワークショップ(観察会)などをひんぱんに開き、管理のあり方など、愛護会としての役割について話しあい、基本的な方向を決めた。

■生物の環境を整える

同愛護会企画担当の西川さん(神奈川県森林インストラクター)は会の役割について「植物や動物などの生き物を大切にする環境を整える管理をしようと考えました。そのためには、昭和30年代の管理方法が必要だと思い、今それを実践しているわけです」と語る。

「下草を刈り、古い木は切って、その木株から芽を出した若い木の林を育てます。すると蝶や昆虫などが集まり生息するようになります。20年～30年の木は伐採して若い木を育て、切り出したクヌギやコナラなどは炭焼きに使います。これが30年代の里山の管理法なんです。ススキや草原の花類が少なくなっていますが、原っぱが少なくなったからですね」。

■子供が遊べる里山に

「将来は、子供が自然の中で遊べるような里山にしたい、というのが愛護会の願いです。ここは皆城山からの地下水も出ますので、その水を引いた田圃を開墾しました。地元の3つの小学校が体験農園として稲作に使っています」。

■様々な里山イベント

荒井沢市民の森愛護会は、市民の森の管理のほかにも、植物・動物観察会、いも煮会、花見会、カゴ作り、炭焼き、学校行事の手伝い、夏休み子供会など、里山整備に関係した様々な行事を行っている。

これらのイベントに女性が果たす役割は大きい。山での作業から帰った人たちへの昼食作りにも心が込められる。